

入選

「私がドイツで体験し、考えた理想の医療と福祉について」

東京都・桜蔭高等学校1年 岩間 優

「歳をとるのも案外いいもんだよ」

父が単身赴任していたドイツを訪れたときのことだ。父の住んでいる隣家には、介護を必要としているお年寄りが住んでいた。昼時になると、手入れの行き届いた庭のテーブルで昼食をとるのが習慣らしい。その老人は、私が訪ねて行ったとき、そうつぶやいた。今日本と同様にドイツでも少子高齢化が進んでいる。この地域でも、その老人のように単身世帯も増えているという。それでも皆、とにかく明るい。近所同士のつきあいも豊かで何かとお互いに助け合う。私とその老人と過ごしていた少しの間にも、手作りのソーセージをお裾分けしに来た婦人や、ホームドクターの声がけにも出会うことができた。どうやら日本とは違う独自の老人福祉の考え方が発達していることにもその理由はありそうだ。ドイツでは要介護の老人でも尊厳のある暮らしが営まれている。住み慣れた家で、必要に応じた介護が受けられ、また要介護にならないための予防や自覚をもった生活を送ることを大切にする。集合住宅に住む別の老人は、介護施設に入居することになったが、希望して先代から使い慣れた家具を持ち込むことができた。さらにペットと一緒に暮らすことも許されていると聞いた。歳を重ねても、いつまでも人としてのプライドを失いたくないという個人の思いが大切にされている。

健康で文化的な生活を維持するために、ドイツでは、それ相応の国民の負担も課せられている。社会保障、福祉予算の割合が高い国は例外なく税率が高い。日本は、安心して老後を過ごすためにもこれからの時代に備える税の整備が早急に必須だ。

菅首相の就任会見で、「貧困や戦争をなくすことが政治の役割」と言及されていた。経済成長さえすれば、貧困や福祉の問題は改善するとは思えない。しかしながら、日本も貧困率（低所得世帯率）が増え続ける事態になれば、ますます福祉も医療も深刻な問題になってくるだろう。そもそも、貧乏であったり医療を必要としている人たちが、本当に必要としていることは、何なのだろうか？ その悪しき事態になっているにもかかわらず孤立していることこそが問題なのではないかと私は考える。だからこそ、それを解消してくれる人が必要なのだ。たとえ低収入でも、豊かな人間関係に恵まれて、手をさしのべてくれる人がいれば、幸せに暮らすことはできる。不測の事態になって、医療を必要とすることになっても、それを支えて寄り添ってくれる人が周囲にいれば、健やかなときに気がつくことはなかった幸せをかみしめることができる。そしてまた病に立ち向かう力を得ることもできるようになる。私はそのことをドイツの暮らしのなかで実感した。そこには医療も福祉も提供される側もする側も両方が納得できる理想的な姿が必要だとも思った。

日本でもこうした発想を参考にして、新しい形の医療と福祉のあり方を模索していかなければならないときにきている。そのことこそ、私たち次世代の使命であると感じた。